

讃岐の狭岑の島にして、石の中の死人を見
て、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首 并せて短
歌

二二〇番

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽か
ぬ 神からか ここだ貴き 天地 日月と共に
足り行かむ 神の御面と 継ぎ来る 中の湊ゆ 舟
浮けて 我が漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに
沖見れば とる波立ち 辺見れば 白波さわく
いさなとり 海を恐み 行く舟の 梶引き折りて
をちこちの 島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の
荒磯面に 廬りて見れば 波の音の しげき浜辺
をしきたへの 枕になして 荒床に ころ臥す
君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来
も問はましを 玉梓の 道だに知らず おほほし
く 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは